

Fukuoka University MEDICAL SCIENCE NEWS

No. 76

編集・発行
福岡大学医学会
福岡大学医学部内

福岡大学医学会ニュース

これからの役割について

福岡大学大学協議員 岩崎 昭憲



平成29年12月より医学部大学協議員に新しく就任いたしました。前任の渡辺憲太郎教授の後任としてこれから2年間の任務になります。大学協議員が参加する協議会とは、皆さんにとりまして比較的馴染みが少ないものではないかと思いますが、私自身も最近まで理解が浅いものでした。協議会は学長、副学長、事務局長、各学部長を中心として、これに各学部からの大学協議員、病院長、研究推進部長、研究科長、付属校の校長などで構成されます。大学規程によりますと本学の予算案、基本計画その他運営及び教学に関する重要な事項を審議するためのものです。もう少し詳しく述べますと上記に加え入学に関する事項、学長・副学長選考、役職員の選出、人事、学則に関する事項など多くを審議する場ということです。現在のところ医学部からは朔医学部長、病院からは井上病院長、向野筑紫病院長とともに参加しております。就任が決まった直後から先輩教授より、医学部や病院に関する案件の場合には、しっかり皆さんの意見を反映できるような発言をするようにと指導を受けました。

人口減に伴う学生数の減少、教育制度改革、研究者の偏り、病院構造の改革などなど大学を取り巻く環境は日々大きな変化をしておりますし、これに素早く対応できる体制が求めら

れています。また医学部では研究棟や病院建替えなど皆さんの切望している案件も多く、働き方改革も道半ばです。

このような案件に関し協議会の場で決まった重要な決議事項に関しては、医学部では学部長が教授会で報告されますが、病院におきましては診療部長会で私が報告することになっています。多くの方に、分かりやすく情報を伝える事ができるように努力したいと思います。

福岡大学医学部は総合大学ですので、他の単科の医大と比べ仕組みも複雑で、一つの事が決まるにも多くの時間と手順が掛かるように感じます。すなわち医学部や病院に関しても、他学部とのバランスの上に成り立つからでしょう。私は、教授に就任して暫くは教室作りに専念しながら医学部内のことは把握していたつもりです。医学部以外のことには、余り興味を持っていませんでしたし、必要も感じませんでした。しかしその後エクステンション委員や学生部委員になり他学部の先生方との会議に参加するようになると、医学部はone of themであることを実感するようになりました。今回の大学協議員は、以前にも増して責任の重い役職のようですので、気を引き締めて努めたいと思います。

皆様からのご支援を宜しくお願いいたします。

教務委員に 就任して

医学部教務委員 高松 泰



このたび柳瀬敏彦先生から引き継いで教務委員を務めることになりました。福岡大学が現在取り組んでいる医学教育の改革についての所感を述べさせていただきます。

全国の医学部で医学教育の質を保証するために医学教育分野別認証評価が始まっており、福岡大学は2018年6月に受審することが決まっています。医学教育分野別認証評価では、まず福岡大学医学部医学科の使命（ミッション）と、目指すべき学修成果（アウトカム）を明示する必要があります。福岡大学の卒業生の半数は開業医として働いており、本学の役割は地域医療の担い手を育てることと考えられますので、福岡大学の使命は「医療のプロフェッショナルとしての誇りと広い視野を持ち、患者に寄り添い、地域社会に貢献する医師を育成」することと定められました。学修成果は、卒業時に①自尊心と高い倫理観を有し、他者と信頼関係を築くことができる、②確かな知識と技能に基づいた、人にやさしい医療を実践できる、③グローバルな視野で地域の健康増進と疾病予防に貢献できる、④科学的探究心、倫理的思考を身に付け、教育的指導ができることです。この学修成果を到達するために身に付けるべき具体的なコンピテンシーが43項目挙げられており、その習得を目指して教育プログラムを作成し、実践していくことになります。また成果を評価して、適宜プログラムの見直し・修正を行っていきます。

我々が受けた医学教育は、各大学の方針に則って実施され、講義は体系化されておらず、臨床技術は卒業後に上級医を見て学びました。大学別の国家試験合格率ランキングは毎年目にしますが、各大学の卒業生が医師としてどのような活躍を

しているかという評価はほとんど見たことがありません。ましてや大学の教育内容や成果が評価されることはありませんでした。福岡大学は卒業時にどのような能力を身につけた医師を育てることを目標としているかを明らかにし、全職員が認識し、その到達を目指して教育を計画・実践していくこと、さらには再評価することは大変理

にかなったことだと思います。この医学教育分野別認証評価に則った医学教育を実践することで、福岡大学医学部の教育水準は上がっていくものと期待できます。

日本は職人の手による高度な「ものづくり」を重んじる文化があります。優れた建造物や絵画、彫刻、工芸品を重要文化財や国宝に指定するとともに、これらを生み出す「技術」を無形文化財、その技術の保持者を人間国宝として尊んで来ました。これらの技術は熟練者から盗んで修得するものという風潮がありましたが、団塊世代が定年を迎え熟練者が減少している昨今は、その技術を伝承するためにもものづくりのノウハウをデジタル化して継承する必要性が論じられています。医学の世界でも、個人で努力して優れた医療技術を身につけた人が評価されて来ました。しかし、多数の学生に効率よく医師として必要な知識や思考過程、技術を身につけることができる教育プログラムを作成することが重要視される時代になっているのだな、と感じています。アメリカの教育システムを取り入れつつ、個人が強い責任感をもって診療に臨み、かつ生涯にわたって技を磨き続ける日本人医師の特徴を保持できるよう教育改革を進めていきたいと考えています。

祝 福岡大学医学紀要第44巻 優秀論文賞

柴山 慶継（皮膚科）

「The Usefulness of a Fluorescent Technique Using Indocyanine Green for Evaluating Patterns of Lymph Flow and Facilitating Sentinel Node Biopsy in Patients with Skin Cancer」

南川 智彦（整形外科）

「The Effects of Dicalcium Phosphate Dihydrate-coated Titanium Implants on Bonding to Bone in Ovariectomized Rats」

新風

new phase

平成 29 年 10 月 1 日付けで
本学へ赴任、昇格された方に
自己紹介をしていただきました。



応用再生医療開発講座
准教授
坂田 直昭

この度、小玉正太教授のご推挙により、応用再生医療開発講座准教授を拝命いたしました。私は平成9年に東北大学を卒業し、平成12年に東北大学消化器外科に入局しました。偶然重症糖尿病に対する組織移植療法である膵島移植のことを知り、学位研究のテーマとして選んで以来16年、この領域を中心に研究・臨床業務に勤しんで参りました。この間に京都大学再生医学研究所や米国ロマリンダ大学への留学を経験し、また、日本膵・膵島移植研究会を通じて小玉先生はじめ多くの知己を得ることができ、医師・研究者としての半生を有意義に過ごさせて頂きました。駆け出しの頃は東北地方のどこかで外科医として全うするものと考えていましたが、人生はわからないものです。

今回、縁あって福岡大学再生移植医学講座の一員に加えさせて頂きました。講座のミッションは再生・移植医学に関する高いレベルの研究成果の発信と臨床への還元、再生・移植医学の面白さを実習講義を通じて学生に伝えること、そして九州地方の臨床膵島移植の推進です。小玉教授を支え、ミッションに全力で取り組み、福大に貢献していきたいと考えております。今後ともよろしくお願い申し上げます。



細胞病態解析学講座
准教授
渡辺 信和

平成29年10月付けで、高松泰教授のご推挙により細胞病態解析学講座の准教授を拝命致しました。

私は昭和60年に熊本大学を卒業し、同第二内科(高月清教授、血液内科)に入局しました。研修先の済生会熊本病院で心筋梗塞の病態に興味を持ち、大学院(同第二生化学)では活性酸素消去酵素による虚血性心筋傷害の実験的治療で学位を取得しました。その後、

焼津市立総合病院、熊本大学、大阪市立大学を経て、平成6年から米国Stanford大学のL.A.Herzenberg教授の研究室に3年半留学しました。当地ではフローサイトメーター(FCM)を実用化した技術者がマルチカラー解析を開発中で、FCMによるヒト疾患の病態解析に興味を持ちました。帰国後は東京大学医科学研究所でHIV感染症、臍帯血移植、生体肝移植、ATLなど、様々な疾患のFCM解析に17年間従事しました。平成27年3月、九州がんセンターに就職しましたが、同年11月の博多シンポジウムで高松先生にお会いしたことがご縁となり、平成28年5月より福岡大学に研究員として就職しました。現在の研究テーマは多発性骨髄腫の進行予測とがん免疫のモニタリングですが、東大医科研でFACSコアラボを長年運用した経験を生かし、同施設の立ち上げにも尽力いたします。今後ともご指導、ご鞭撻のほど、どうぞ宜しくお願い申し上げます。



福岡大学消化器外科学
准教授
吉田 陽一郎

平成29年10月1日より准教授を拝命いたしました。私は平成8年に産業医科大学を卒業し、平成22年から福岡大学消化器外科でお世話になっています。

大腸がんの集学的治療を専門とし、がん治療に少しでも良いこと・役に立つことをしたいと考えています。今までのがん治療は、手術や化学療法から経過観察に至るまで画像診断をもとに行われていましたが、これからは遺伝子情報を併用する時代に突入いたしました。当科でもリキッドバイオプシーを導入し、がん治療の成績向上を目指したいと思います。また、円滑かつ計画的な治療にはSupportive careも重要な役割と考え、様々な取り組みも行っています。一つの診療科だけではできないことに限りがありますので、たくさんの方々と共に歩んでいけたらと思います。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



腫瘍・血液・感染症内科
准教授
田中 俊裕

昨年10月より腫瘍・血液・感染症内科准教授を拝命いたしました。私は福岡大学の学生のと時から、疾患としてのがんに関

興味があり、将来がんの研究や診療に従事したいと考えていました。卒業後当時の福岡大学第一外科に入局し、救命救急センターや麻酔科での臨床研修の後、2年間外科修練でがん診療に携わりました。本学大学院に進学後は、がん増殖因子についての基礎研究で学位を取得、引き続き札幌医科大学分子医学研究部門へポスドクとして3年間国内留学し、癌遺伝子治療の研究で特許申請も行いました。その後、福岡大学医学部生化学にお世話になり、難治性癌に対する抗体創薬を目指した研究活動を継続する傍ら、研究した成果等を患者さんに直接反映できる場が欲しいと再び考えるようになりました。そんな折、日本でも癌種にこだわらず幅広く診療に携われる腫瘍内科が新設され始め、2007年から福岡大学腫瘍血液感染症内科で診療を行っています。同時に福岡大学腫瘍センターがん相談支援部門長として、がん患者さんへの情報提供支援を行っています。特に、がん患者さんや一般市民向けの「がんセミナー」は昨年9月に足掛け10年で第100回の節目を迎える事が出来ました。また、医療情報部も兼務し電子カルテシステムやがん登録にも従事させて頂いています。今後もがんに関わる診療、研究、社会活動と学生教育に力を注いで行きたいと考えていますので、何卒宜しくお願い致します。



腎臓・膠原病内科
准教授
三宅 勝久

平成29年10月より、中島衡教授の御推挙により福岡大学病院腎臓・膠原病内科准教授を拝命いたしました。私は平成9年に久留米大学医学部を卒業し、九州大学医学部第一内科（現病態修復内科学）に入局しました。2年間の研修後大学院に進学し、中島衡現腎臓・内科学教授の御指導の下ループス腎炎におけるサイトカインの研究を行いました。大学院修了後は、平成15年より約3年間米国テキサス大学サウスウェスタンメディカルセンターで細胞周期に関わる分子に関する研究を行いました。帰国後、九州大学病院で医員として膠原病の診療に従事し、平成19年10月より福岡大学に参りました。私は、リウマチ・膠原病の診療を行っています。膠原病は、免疫異常により様々な臓器に症状を呈する全身性の疾患です。患者の全身を診察する姿勢をもち、問題抽出、問題解決型診療の実践できる広い視野をもった医師の育成を目指しております。また、この10年間多くの科の先生方に御指導頂きました。この場をかりて感謝申し上げます。今後とも御指導、ご鞭撻を賜りますようぞ宜しくお願い申し上げます。



小児科
准教授
井上 貴仁

このたび福岡大学病院小児科准教授を拝命いたしました井上貴仁です。平成4年に福岡大学を卒業後、その温かな雰囲気と惹かれ福岡大学小児科学教室に入局し研修医生活をスタート致しました。その後満留昭久福岡大学名誉教授のご指導のもと小児神経学を学び、平成7年から九州大学大学院で、ウイルスベクターによる遺伝子治療の基礎研究を、平成18年には福岡大学病院遺伝医療室の開設に伴い、小児科診療を行いながら遺伝カウンセリングを行って参りました。

疾病構造の変化、少子化、新薬の開発等に伴い小児科診療も予防医学の重要性が増してきています。このような背景のもと、福岡大学小児科では全国に先駆けて、ライソゾーム病の早期診断・早期治療を目指した新生児マススクリーニングの取り組みを始め、その有用性が示されています。

これまで小児神経専門医、てんかん専門医、臨床遺伝専門医として、小児神経疾患、遺伝性疾患、てんかん患者さんを診療してきた経験を生かし、今後も単に疾患の治療に終わらず、その子ども、家族の視点に立った診療を実践していくことはもちろんのこと、若手の先生や医学生と共に考えながら小児科のやりがい、醍醐味を伝えていく所存です。今後とも、より一層のご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



病理部
准教授
濱崎 慎

この度、鍋島一樹教授、竹下盛重教授のご推挙により福岡大学病院病理部准教授を拝命致しました。平成9年に福岡大学医学部を卒業し、福岡大学病院外科での臨床研修、筑波大学病理学教室への国内留学、ボストンのDana-Farber Cancer Instituteへの海外留学を経て、平成16年の帰国を機に福岡大学病理学教室に入局し、肺腫瘍をはじめとする固形腫瘍を中心に、

外科病理診断の立場から医療への貢献を目指すこととなりました。在任中にはハワイのQueen's Medical Centerへ赴き、細胞診断への知見を深める機会も頂きました。

病理はやりがいのある分野ですが、病理医自体は圧倒的に不足しており、その育成が急務とも考えられています。診療・研究・教育を通して、特に医学生を含む若い世代の方々に病理診断の重要性を知って頂き、病理を目指してくれる方が増える様に努力していきたいと考えています。また、病理診断では科横断的な知識を必要とし、常に情報のupdateも求められます。病理医のみでは対応困難な場合もあり、臨床医との意思疎通も重要と痛感しています。病理診断に興味をお持ちの先生方にも広く門戸を開放し、十分な意見交換が出来る場も提供できるよう尽力したいと考えています。微力ながら、病理診断が患者様の治療に最大限貢献できるよう精進いたします。これからもご指導、ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。



病理学
講師

瀧田 義浩

幼 少時の愛読書は、百科事典の中の呪術の本でした。極彩色に彩られた装飾具や紡がれる言葉に惹かれ、何度も頁を捲っていました。長じて、金枝篇や悲しき熱帯、美味礼讃、随園食単などに触れ、まだ見ぬ世界の生活を夢想していました。また、日本語の持つ「間」も不思議に思い、音に表れない言葉にも興味を持っていました。将来は高等遊民となり、世界の文化を遊覧する生活に憧れていましたが、諸般の事情で能わず、医師となりました。卒業時には精神科や麻酔科への入局を考えていましたが、故眞榮城兼清先生や古田耕先生（現、神奈川県立がんセンター）のお話から、当時の第一外科に入局し、膵胆道疾患に従事することとなりました。充実した外科生活でしたが、途中1年程お邪魔した病理を忘れられず、外科を退局しました。病理では、岩崎宏福岡大学名誉教授、中山吉福先生（現、村上記念病院院長）に御指導頂き、外科での経験も生かしながら膵胆道疾患の病理診断に携わっています。最近では肝腫瘍や血管内物質の解析も手掛けています。当大学では関わっている先生方の少ない領域ですが、よろしく願い申し上げます。



内分泌・糖尿病内科
講師

田邊 真紀人

柳 瀬敏彦教授のご推挙により平成29年10月1日付で福岡大学病院内分泌・糖尿病内科講師を拝命いたしました。私は平成10年に九州大学を卒業し九州大学第三内科に入局しました。卒後1年目の私を病棟医長としてご指導下さったのが柳瀬先生で、先生とはそれ以来のご縁です。糖尿病や肥満症を含む内分泌代謝疾患全般を担当しますが特に内分泌疾患が専門です。平成14年から11年間は北九州市の国立病院機構小倉医療センターに勤務し、専門分野に加え内科全般の経験を積む機会を頂いたことが現在の私の内科診療の礎となっています。平成25年から福岡大学にお世話になり、柳瀬教授のご指導の下アンドロゲンとメタボリックシンドロームに関する臨床研究で学位を取得しました。また本邦における副腎皮質機能低下症の診療指針、副腎性サブクリニカルクッシング症候群の診断基準の策定に関わるという貴重な経験をしました。今後も日々の診療に注力し、そこから生じた疑問に立脚した研究、また難解と思われがちな内分泌代謝疾患について学生や若い先生方に分かりやすく伝える教育の面でも努力し、微力ながら福岡大学医学部・病院へ貢献できればと考えております。ご指導、ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。



循環器内科
講師

桑野 孝志

平 成29年10月より福岡大学病院循環器内科講師を拝命いたしました。私は、平成14年に福岡大学医学部を卒業し、福大病院での内科初期研修を経て、福大病院および済生会福岡総合病院で、循環器内科医として診療に従事いたしました。特に、虚血性心疾患に対するカテーテルインターベンション診療に多く携わることができ、平成19年に福大大学院に進学した後も、主にカテーテルインターベンション治療レジストリーの作成、予後規定因子の策定などの臨床研究を行いました。また、大学院在学中に動

脈硬化因子であるコレステロール代謝研究も併せて開始し、3年間の基礎研究留学を米国フィラデルフィアのペンシルバニア大学で経験致しました。帰国後も、朔啓二郎現医学部長、三浦伸一郎心臓・血管内科学教授の下、引き続き福岡大学での診療、研究、教育を担当させて頂くことになりました。今後は福岡大学が掲げる”Active”精神を、まずは自分自身の信条として、基礎研究から救急領域まで、実践して行けるよう努力してまいります。今後ともご指導のほど、よろしくお願いいたします。



耳鼻咽喉科
講師
竹内 寅之進

平成29年10月をもちまして、坂田俊文教授のご推挙により福岡大学病院耳鼻咽喉科講師を拝命しました竹内寅之進と申します。

私は、平成11年に九州大学医学部を卒業し、九州大学耳鼻咽喉学教室に入局しました。耳鼻咽喉科医を志したのは、私自身が幼少時の交通事故で難聴をかかえていることもあり、感覚器に対する機能外科に興味を抱いたからです。九州大学病院で研鑽をつんだ後、九州がんセンター頭頸科配属となり、機能外科とは相反する生命を扱う領域に魅力を感じ、当初の思惑とは別に頭頸部腫瘍を専門とする道を進むに至りました。その後、大学院では血管新生に関わる細胞内シグナルの解析を行い、学位を取得しました。さらに、倉敷中央病院では数多くの手術症例を経験させていただき、佐世保共済病院では科長としての采配を学びました。福岡赤十字病院を経て、平成28年6月より福岡大学病院耳鼻咽喉科助教に就任しました。

大学病院での勤務経験は少ないですが、市中病院で得た経験を活かしつつ、「患者さんファースト」の考える医療を提供し、後進の育成につなげたいと考えています。

未熟者ではございますが、今後ともご指導・ご鞭撻のほど、よろしくお願いいたします。

福岡大学医学会第77回例会報告

■日時／平成30年2月28日（水）18：00～19：00 ■場所／医学部臨床大講堂

【進行】集会幹事 小玉 正太

- 1) 開会の辞 集会幹事 小玉 正太
- 2) 会長挨拶 医学部長 朔 啓二郎
- 3) 新任講演 座長…朔 啓二郎 [講演 25 分, 質疑応答 5 分]

講演者…山本 卓明(整形外科 教授)
「ステロイド治療と骨壊死 ― 現況と対策 ―」

4) 福岡大学医学紀要44巻優秀論文賞授与式

受賞者：柴山 慶継(皮膚科学)
南川 智彦(筑紫病院整形外科)

5) 受賞論文の要旨講演 [講演 10 分(質疑応答含む)]

講演者…柴山 慶継 座長…今福 信一

「The Usefulness of a Fluorescent Technique Using Indocyanine Green for Evaluating Patterns of Lymph Flow and Facilitating Sentinel Node Biopsy in Patients with Skin Cancer」

講演者…南川 智彦 座長…山本 卓明

「The Effects of Dicalcium Phosphate Dihydrate-coated Titanium Implants on Bonding to Bone in Ovariectomized Rats」

6) 閉会の辞 集会幹事 小玉 正太



講演された先生方を囲んで
(左から竹下先生、山本先生、南川先生、柴山先生、今福先生、朔会長)

教室だより
Letter from a classroom



生化学

生化学講座は、平成27年4月より三代目主任教授の安永晋一郎教授によって主宰されています。安永教授は、白須直人講師と大野芳典助教（広島大学原爆放射線医科学研究所）の協力を得て、前任地の広島大学から引き続いて行っている「造血幹細胞や白血病幹細胞の活性制御における分子機構の解析」をテーマに研究を行っています。

本講座は、昭和47年の福岡大学医学部医学科開設に伴い開講され、初代主任教授の松岡雄治先生、二代目主任教授の黒木政秀先生により、腫瘍関連抗原として名高いCEAの抗原同定やモノクローナル抗体作製による測定法の開発で有名な研究室でした。その流れを汲んで、現在は、芝口浩智講師が「癌の超音波療法の開発」、白須講師が「癌の近赤外線療法の開発に関わる研究」を行っています。

瀬川波子准教授は、出身教室である心臓・血管内化学講座と協力して「脂質異常症の診断法と治療法の開発」をその卓越した統計学的解析技術を持って強力に推進しています。

また、かつて本講座の准教授を務めた産婦人科の宮本新吾教授から派遣された大学院生2名が、分子生物学的解析を含む共同研究を行っています。

生化学講座は、医学部学生のM1「生化学」とM2「生化学実習・演習」を担当しています。先代の黒木教授より「医用生化学—生体物質の代謝と異常—」という教科書を引き継ぎ、毎年それに改訂を加えて、授業を行っています。

「生化学」の講義は、平成28年度からM2からM1へ移行しました。最近では、高校で「生物」をほとんど学習しないで入学してくる医学部学生も多いのですが、M2から怒涛のごとく始まる専門教育とのギャップが大きく、ここで躓いてしまう学生が多いことが問題になっていました。そこでM1に移行された「生化学」講義が、そのギャップを埋めるような存在になってくればという願いのもと、単に「生化学」のみで完結するのではなく、他の基礎医学の科目や臨床医学との垣根を超えた「統合基礎医学」を教えるというスタンスで教科書・授業を構成しています。目標は、M4で受けるCBTの再試験受検者を半分程度に減少させることです。

当講座では、上記の研究と教育の両面に関して、今後も一層努力して参りますので、宜しくお願いします。



第44回 医学部慰霊祭



第四十四回福岡大学医学部解剖体慰霊祭は、ご遺族並びにご来賓の方々、本学教職員と学生約四百名が参列し、平成二十九年十月二十一日（土）午後二時から福岡斎場において厳粛に執り行われました。

今回祀られた霊位は、学生の医学教育の目的で、系統解剖のために献体された三十六柱、病院で死去されて病因究明のために病理解剖を御承諾頂いた二十四柱、合わせて六十柱でした。

献灯献花の後、厳粛な雰囲気につつまれて慰霊祭は進行し、朔 啓二郎医学部長は祭詞の中で、医学の発展のために欠くことのできない解剖にご献体頂いた霊位とご遺族、さらに、ご協力を頂いた各種関係機関に敬意と謝意を表されるとともに『私どもは、日々花を供え、香をたいて六十柱の科学に対する貴きご献身を偲び、敬意と感謝の念を表していますが、本日、ここに一堂に会し、皆様方の崇高な御遺志を今一度思い起こして、今後益々、勉学、研究に励み、人類の幸福と福祉に貢献できますよう努力することをお誓い致します』と新たな誓いを披瀝されました。

教室だより
Letter from a classroom

衛生・公衆衛生学

衛生・公衆衛生学教室は、(旧) 衛生学教室と(旧) 公衆衛生学教室が統合され2011年に発足しました。2016年より有馬が二代目主任教授を務めさせていただいております。2015年から働いてくれている辻・川添先生に加えて、2017年4月から前田先生、10月からは佐藤先生がスタッフに加わり、教室のアクティビティは確実に高まっています(教室写真)。



教育

教育面では、医学部3年生の公衆衛生学を担当しています。実習では、学生たちを保健所、介護施設等へ派遣し、病院以外の現場で住民の健康を守るためにどのような活動が行われているかを体験してもらっています。また、目隠しをしたまま街に出て、視覚障害を体験する実習も行われています。2017年からは、健康教育形式の実習も取り入れました。高齢者サロンでは、学生が、住民の方々に認知症予防の講義をおこなっています。大濠中学校では、学生が、中学1年生に喫煙・薬物乱用の恐ろしさを伝え、悪い誘いを断る練習をさせています(大濠実習写真)。



さまざまな実習から得られた経験は、2日間にわたる発表会を通して、学生の間でシェアしてもらいます。2年生の基礎配属では、さらにディープな現場体験を積んでもらいます。このような教育を通して、地域の保健・医療・福祉全体を理解し、Public Health Mindをもって医療に貢献することのできる医師の養成を目指しています。

また、EBMに興味のある学生を対象に、定期的にゼミを開催しています。2017年10月に愛媛県松山市で開催された日本高血圧学会では、5年生の野原さんが研究成果(血液透析患者において血圧変動が死亡に及ぼす影響：OCTOPUS研究)を口演発表しました(高血圧学会写真)。



研究

研究面では、福岡大学独自の疫学研究を立ち上げるべく尽力しています。また、学内において、年間50件程度の統計相談を実施しています。一部の先生方の統計相談は、共同研究となり、共著論文の出版にいたっております。さらに、オーストラリアNSW大学ジョージ国際保健研究所等と共同で、大規模臨床試験にもたずさわっています。以上のような研究を通して、臨床の現場で役立つ質の高いエビデンスを福岡大学医学部から発信してゆきたいと思います。

衛生・公衆衛生学教室では、福岡大学における医学教育をさらに充実させるとともに、福岡大学医学部全体の高い研究レベルを維持向上させるべく、教室員一同なお一層努力してまいり所存ですので、どうかよろしくお願い申し上げます。

教室だより
Letter from a classroom



呼吸器内科学

呼吸器内科学は、2017年4月より三代目教授の藤田昌樹により主管され、福岡大学病院では「呼吸器内科」を標榜しています。呼吸器内科では、肺がん、閉塞性肺疾患、気管支喘息、肺炎、抗酸菌症、間質性肺疾患、睡眠時無呼吸症候群、呼吸不全、移植医療などの疾患に対して診療を行っています。他臓器疾患を合併する呼吸器疾患や、他臓器疾患との鑑別が必要な呼吸器疾患も多く、また高齢者が中心の領域ですので、幅広い知識と患者さんへの全人的ケアが必要とされます。

当科のべ外来患者数は、13,279名／年、入院患者数は、879名／年、気管支内視鏡研査は、339件／年です。外来内訳としては、肺がん、気管支喘息・COPDなどの閉塞性疾患、肺炎・肺非結核性抗酸菌症などの感染症、間質性肺炎などが中心となっています。入院内訳としては、肺癌が約半数以上を占め、肺炎、間質性肺炎、睡眠時無呼吸症候群検査などが続きます。我が国では、肺がん患者数が激増しており、当院呼吸器内科でも御多分に漏れず肺がん診療が大きなウェートを占めています。肺がん領域の治療の進歩は目覚ましいものです。治療薬が次々と導入され、外科療法ができない患者さんの生存期間を著明に延長しています。また、

免疫チェックポイント阻害薬の導入により、免疫療法という新しい治療戦略を得ることができ、ますます生存期間の延長が期待できます。以前から当院呼吸器外科の肺がん手術症例は福岡県内でもトップクラスですが、内科領域でも他施設に比肩しうる症例数を目指し、外科・放射線科・病理学と共同しながら肺がん診療に注力してまいります。

肺がん以外でも、気管支喘息に対するサーモプラスティや生物学的製剤、間質性肺炎に対するクライオバイオプシー、肺移植などの先進医療から気管支炎・感冒まで、呼吸器内科領域であればすべての疾患を診療するのを目標としています。当科所属のどの医師も呼吸器内科全領域を診療できる知識・スキルを持っていただくのが基本方針です。「断らない医療」をモットーに、紹介医の先生方からの依頼は原則引き受けています。福岡市および近郊は医師が多いとは言っても、まだまだ医療過疎の地域も広い印象を持ちます。特に呼吸器内科は内科の他領域と比較して、専門医が少ない状況です。福岡大学西新病院へのスタッフ派遣を行うなど、福岡市西部・糸島地区を中心に呼吸器内科疾患診療充実に邁進していく所存です。今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。



長い間ありがとう
ございました

平成29年10月1日～平成30年2月28日までに退職された方

■長浜 孝講師（筑紫病院内視鏡部）

以上、12月31日付け

教室だより Letter from a classroom



精神医学

当院精神神経科は、2015年4月より3代目となる川寄弘詔教授が主管しています。当科開設当初から精神分析的な臨床実践と、大学病院として全国ではじめて設立されたデイケアを持ち、精神科的なリハビリテーションを早期から行ってきました。生物学的問題に加えて、個人の問題を扱う精神療法とデイケアに代表される集団療法を実践する数少ない大学病院精神科として知られてきました。

診療科である精神神経科には、外来、病棟、デイケアの3部門があり、それぞれ連携しながら変化に対応しています。年間700~800人の外来新患のうちリエゾンの症例が3割を占めるようになり、総合病院の精神科としての性格を一層強めています。このような中、他科との連携を優先事項と位置付け、精神神経科内の部門間でも密接な連携のもと、身体合併症患者のコンサルテーション・リエゾン、緩和ケアチームや認知症疾患医療センターへの参画、救命救急センターと協力した自殺企図者への介入を積極的に行う体制に移行してきました。また、産婦人科や小児科と協同した周産期母子、小児や児童思春期（虐待児とその家族、発達障害、ADHDなど）への対応といった治療活動にも力を入れています。平成28年度からは「リエゾン・チーム」を創設し、幅広く迅速に対応できるようなシステムで運用しています。このような取り組みを他院に先駆けて行ってきた結果、早期に病棟の「急性期医師配置加算」を算定できる体制になりました。

外来部門では、気分障害、性別違和、臓器移植、治験、精神分析的

精神療法など特徴的な専門外来を持っています。デイケア部門では、統合失調症や発達障害などを中心とした時代のニーズに合わせた社会復帰プログラムも継続しています。

現在、当科では他科との連携をさらに強化し、他の施設では困難な治療の提供を目指しています。産科・小児科との合同カンファレンスでは、新たな課題が見えてきている状況です。十余年にわたって継続している放射線科、神経内科との合同カンファレンスでは、認知症性疾患の症例についての画像を検討し経験を蓄積しています。救命救急センター・ERに搬送された自殺企図者は、全症例に対して精神科医が介入し継続的な支援を行えるようになり、法医学教室と共同で基盤研究にも取り組もうとしています。さらに、臓器移植にも対応できるシステムも出来上がりました。

今後これらの診療体制、研究をさらに充実させ、さらに大学病院としての役割を果たすべく変化の先頭に立って、わが国の精神科臨床をリードしていく存在であり続けたいと思います。



学位取得

次の方は、福岡大学より博士（医学）を授与されました。

課程修了による
学位取得者
[平成29年9月13日]

- ・ 江藤 歩（病態構造系専攻）
- ・ 三嶋 崇靖（病態構造系専攻）
- ・ 加藤 悠太（先端医療科学系専攻）
- ・ 小牧 智（先端医療科学系専攻）
- ・ 深川 怜史（先端医療科学系専攻）

論文提出による
学位取得者
[平成29年10月5日]

- ・ 胡 耀鵬（生理学 助教）
- ・ 渡邊 淳子（リハビリテーション部 主任）
- ・ 宮地 素子（皮膚科 助手）
- ・ 橘 正剛（やました甲状腺病院 内科部長）
- ・ 阿部 創世（呼吸器・乳腺内分泌・小児外科 助手）